

様式 1

研究報告書（平成 28 年度）

提出者 猪股祐介

提出年月日 2017 年 4 月 2 日

【本ユニットにおける研究テーマ】

和文 満洲移民研究におけるジェンダー視点の欠落

英文 The lack of gender perspective on the study of Manchuria emigration

【研究のねらいと目的】（600 字程度）

本研究は、満洲移民研究において、ソ連軍参戦後の満洲移民女性に対する強姦等の戦時性暴力が研究されてこなかったことを中心に、ジェンダーの視点の欠落がいかなる問題を引き起こしたかを明らかにすることである。

満洲移民研究は 1970 年代後半以降歴史研究が本格化し、1990 年代前半に入ると社会学研究が加わり、その研究テーマは多様化している。

満洲移民研究の研究テーマは次の 4 つに大別される。(1) 満洲移民政策の展開、(2) 満洲移民の送出過程、(3) 満洲移民の営農実態、(4) 満洲移民の集合的記憶、である。(1)では満洲移民が主に軍事目的から政策立案・実施されたこと、(2)では日本国内の地主・小作関係の矛盾を転化するために送出されたこと、(3)では現地住民の土地・家屋を収奪して入植し、営農は現地住民を小作・雇農として搾取したことが問題化された。これらから満洲移民が帝国日本の侵略の一翼を担ったとされた。(4)では満洲体験へのノスタルジーと引揚体験の被害体験を中心に満洲移民体験の集合的記憶が形成され、入植時の現地住民に対する加害体験の忘却が問題化されてきた。

「大陸の花嫁」と呼ばれる満洲移民女性を対象を絞った研究もあるが、(1)(2)に限られており、開拓団のなかで女性団員がいかなる地位にあったかやソ連参戦後の戦時性暴力に関しては研究されていない。

このように満洲移民研究は満洲移民の侵略性やその集合的記憶における被害者意識の肥大化を問題化する一方で、開拓団内部の女性団員に対するジェンダー差別について研究してこなかった。このことが満洲移民の表象にいかなる歪みをもたらしたかを明らかにする。

【研究業績】 学会報告・論文など

・猪股祐介. 2016. 「満洲移民研究における戦時性暴力の位置付け」. KUASU 研究員学際融合コロキウム（於. 京都大学）

【成果の概要】 (800字程度)

満洲移民研究において、ソ連参戦後の戦時性暴力が長い間、研究対象とされてこなかったのはなぜか。その理由は次の3つによることを明らかにした。

第一に満洲移民の送出過程や入植後の営農が主な研究対象であったからである。満洲移民史研究会（1976）は満洲移民政策の立案過程や農村更生運動と結びついた送出過程、入植後の営農における地主化や雇農の使用など多岐にわたるが、それらは敗戦前までの出来事を扱っている。満洲移民史研究会（1976）を批判するかたちで、玉（1999）は満洲移民政策が日中戦争以降、満洲の食糧生産基地化の一環に組み込まれたことを、今井（2005）は地主化や雇農の使用による営農の破綻を、小都（2010）は満洲移民の水田改良事業が一定の成果を収めたことをそれぞれ研究してきた。しかし引揚げについては、筆者の研究を除けば、蘭（1994）や坂部（2008）で断片的に行われたに過ぎない。

第二に、満洲引揚げ時の戦時性暴力について、ソ連兵や八路軍による強姦があったことは体験記等に多数記されているが、その詳細について資料が残っていないからである。蘭（1994）が依拠した『東陽資料』や『甘南資料』の中に戦時性暴力の記録はない。坂部（2008）が依拠した長野県慰霊碑や泰阜村開拓団元団員の語りにも戦時性暴力の記録はない。これら先行研究から分かることは、開拓団資料や慰霊碑など公的記録に戦時性暴力が記されることは稀であり、これら公的資料に拠る限り、戦時性暴力は研究対象にならないことである。

第三に、満洲移民の引揚げを「引揚げの悲劇」と一括りにし、戦時性暴力を副次的に扱ってきたからである。猪股（2007）は郡上村開拓団におけるソ連兵による強姦を他の引揚げ経験と比較して分析したに過ぎない。猪股（2008）は黒川村開拓団におけるソ連兵向けの慰安所の設置を、戦後の再集団化の一つの要因として扱っているに過ぎない。猪股（2013）は戦時性暴力を主題としているものの、一つの事例をもって強姦を出征兵士と開拓団幹部のホモソーシャルな関係により解釈し、その経験が語られた理由を、慰安婦の社会問題化に求めるなど問題が多い。

【通信欄】